# 徂徠学における「道」と「学」

許家晟

徂徠学において、「道」の一文字がこの上なく重要な意味を持つことは言を俟たないが、肝心の「道」の内実について、先行研究では概ね三種の論旨による議論がなされ、いまだ決着が付いていない。一つは現在でも主流である「全体を包摂したもの」という議論、一つはかつて尾藤正英氏が提唱した「礼楽刑政をして礼楽刑政たらしめるもの」、すなわち背後にある原理という議論、一つは田原嗣郎氏の尾藤氏に対する反論でもある「礼楽は三代で完成された」ものとして、パーツを組み替えればいつまでも使えるという議論である。

この三種の議論はどれも説得力のあるものであるが、一方でいずれも完全に他をおさえて定説となるに至らず、紛々とした状況を打開できないことは、やはり徂徠研究において見過ごせない重要な問題である。そこで本発表はこの三つの説を合わせて分析したうえで、徂徠学における「道」と「学」との関係という視点から、従来の『弁道』『弁名』や『学則』など、このテーマと直接的なかかわりを有する著作のみならず、その他の政策論や兵法書などにも合わせて分析し、新たな視点による検討を行いたい。その結論から、この二つのキーワードは密接不可分なものであることを指摘し、徂徠学における「道」の研究に、新たな一石を投じることを目的とする。